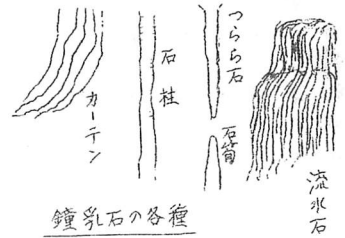


狩生新洞の鐘乳活動は全般的に大規模で、風運・小半に北方なないダイナミックな、しかも特異なものが多く、北側の壁は異質の岩盤ででき、鐘乳活動は顕著でないが、南側は六〇〜八〇度の傾斜で、流れ石を主体にかなり厚い鐘乳石の壁をつくっている。また粘土が一面に流れた時代があり、その上に流れ石が殺せん形形成されたため、容易に剝離しやすい箇所が点々とみられる。

鐘乳活動

その奥に第三洞が連なり、第二洞の床下には第五洞があらって、おびただしい鐘乳石で隔てられている。四洞と八洞は、五洞に連なる一連のすき間に発達した部屋である。六洞は、これらに並行して流れる約六〇度の地下河で、常時水が絶えることなく第七洞に注いでいる。その七洞は半ば泥で覆われ、出水時には泥水をかぶる。最上部の第八洞から、最下部の第九洞の洞口に至る斜面距離は凡そ百二十メートル、高低差およそ六十メートルである。この狩生新洞の三大空洞は九洞、十洞、一洞の三つで、それぞれ奥行四十メートル高さ二十メートル、奥行三十メートル高さ十五メートル、長さ四十メートル高さ二十メートルである。



鐘乳石の各種

であるうか。興味深い。

この鐘乳洞の鐘乳活動で、最も顕著なもののは流れ石である。第九洞の、その広さ二〇〇平方メートルにおよぶ流れ石の表面は、純度の高い方解石の結晶で覆われ、上部にシリメン岩を発達させている。第十洞では東南側の壁、第一洞では南壁に発達し、これに数十本の石筍が林立して実に壯観である。第五洞の流れ石は鈔鐘を伏せた形をし、その高さは実に八メートル、すそまわり十メートルの整った形をしていて、壮大でしかも美しい。

第二に「つらら石」であるが、第五洞の天井に数百本、その大半が先が折れていて惜しい。これは石灰岩原石採掘の際の発破によるものを含んでいるようである。第九洞には長さ一メートルの鐘乳帯、三〇センチの鐘乳管柱が無傷である。第三に、石筍では第五洞の中央に、地震で傾いてその壁にもたれかかった、高さ五メートル、直径九〇センチの傾斜石筍をはじめ、第一洞に大規模な石筍台をみることで、また第三洞には、長さ二メートルの「つらら石」が、高さ一メートルの石筍に接近し、石柱に完成するまであと一メートルの間隔にこぎつけているものもある。

第四に、石柱も他洞にみられぬ巨大なスケールをもつ

この新洞内下段、地震による崩壊のあともあり、第五洞の傾斜石筍と流れ石の亀裂は、地震によるものとす。以外には考えられぬ。第九洞の床面にも同様の亀裂がある。また折れた「つらら石」の先端に、再び小さく「つらら石」を指状に伸ばしている。その長さ八〜九センチの伸ぶ字数は約三〇〇年といわれるので、或いは室永四年（一七〇七年）の地震によるもの



(第5洞) 傾斜鐘乳石

北側の壁より下がった大石筍  
直線約 高さ約 5m  
地震による地盤の変化であろう



(第9洞) 大石柱

大石柱 A 直径約 高さ 5m (6m)  
B 直径約 高さ 2m (3m)  
鐘乳帯 長さ 1m

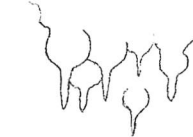
ているのである。第九洞入口に、直径九〇センチ高さ五メートルのと、直径九〇センチ高さ二メートルの二本があり、まさに大石柱とよぶにふさわしい。基部が土砂で埋まっているので、それごとく除けば、更に一倍は高くなるだろう。第十洞には、部屋を二分するかどうかで、中央に物すごい大石柱群がある。数十本のつらら石と石筍が複雑に接しあい、全体がほとんど一束に連なり、直径約五メートル、高さ約十メートルの林立した柱となっている。風蓮や小半など他の鐘乳洞にも、全く見ることのない景観に圧倒されるほどである。

以上四種の鐘乳石の外に、さほど大規模ではないが、この新洞の性質、歴史、環境を物語るものとして、次のような特異な鐘乳石がある。

〔球状鐘乳石〕石灰岩の壁にしみ出た鐘乳液は、表面に方解石の結晶を作るが、次第に外へ外へと結晶を広げて次第に球状に成長し、中心は空洞になった珍らしい鐘乳石である。第一洞東奥の壁に、半ダ

ンゴ状にたれ下っている。

〔蓋つき唾石〕唾石は千枚皿(またはリムストーン)ともよばれ、あまり珍らしくもないが、新洞では第六洞に大規模な唾石がつくられ、再び地下水で破壊さ



(第1洞) 球状鐘乳石

れたところがある。そのすぐ上に、直径四〇センチの唾石があり、表面が厚さ五センチの膜状鐘乳石で覆われている特別なものがある。つまり蓋のついたリムストーンである。

〔石花〕鐘乳石の中を浸透する重炭酸カルシウム液は、表面で空気にふれ、炭酸ガスと水分を放して、再び結晶をつくる。その時、樹枝状の洞窟サンゴを作るが、その一種の石花(アンソングイト)が、第六洞の唾石のふち面に、掌状に生じている。大きいものは長さ十二センチもある。

〔方解石プール〕第九洞の奥にリムプールが一つあり、内壁に方解石(カルサイト)の針状結晶を作っている。針の長さは一センチ位、透明で、水晶のようである。出水時には冠水することもあり、現在なお盛んに発達中である。

〔洞穴真珠〕磔を核として周囲を方解石の結晶で包んだもので、俗に「豆石」と云い、発達するに従って球形になる。即ち洞穴に生じた真珠である。第七洞の床面に、天井からのしずくを受けてできつつある。

〔カーテン〕オーバーハンングした平滑な壁面を、伝って流れる鐘乳が膜状に発達して、幕を斜めに垂らしたかっこうで、何枚かのひださつくる。第一洞の東の奥に十二枚ほど並んで出来ているが、おしいことに損壊が多い。

### 開発の意義

鐘乳洞は全国に数多く分布し、景観を商品とした観光開発に供すれば、銘洞には限られてくる。

新洞は、地理的条件に恵まれず、幸か不幸か今日は自然のままに眠っているが、景観、規模からみても、風道、小半の両洞に劣るものを持っている。しかもこれらの鐘乳洞は、それぞれ個性を持っていて、学術的にも重要な意義をもっているものが多い。未知の鐘乳洞

でもればある程期待も大きい。

この狩生新洞は昨年夏、佐伯市觀工課と狩生地及び、保護開祭を手がけた。觀光資源として開祭し、一般に提供するまでは、条件整備も多難をきわめることである。なせかなら、この狩生新洞は、入洞に相当な用具や準備がいる。洞内は緊破の影響が残り、落石などの危険が多い。第一、入洞そのものが十数人のロープによる収めならぬので、青壯年時代の体力が必要である。

私は、洞内の景觀を釐乳洞のいのちととらえず、學術的に鐘乳活動の一つ一つに目を注ぎ、大自然の管見、その記念物として受けとめ、保存保護には万全を期してほしいものである。

開祭と破壊は、表裏一体という説もあるが、洞窟の自然をよく見きわめたと上なら、破壊は最少限に止められる。即ち狩生新洞の特異な価値を認め、万全の賞護管理が望まれる。その辺の事前調査も、管理体制の確立が、觀光資源として公開される以前に必要である。

この郷土の天然記念物が一般に公開され、學術的研究の対象となり、一般の探訪が許されるのはいつの日になるのであろうか、待た速しいものである。(おもしろ)

(埋葎) 清江 高野のお四圍山

清江の町を一望出来る高野の山は、八十八ヶ所を巡拝する本四圍山がある。因のように自然石でかまされたおたま屋の中には、本四圍の寺々を「查摩」が刻まれている。これはどこにもあること。



このおまは、いさかちがって、仏様の頭上に入れ所番号、右側にトサとかアワとか片浪各で因名、その下に寺の名があり、左がわに寄進者の、浦の名と名前、例えば「いのかくしおよし」といった格好。おもしろいと思つた。(用)

紹介

富尾神社の神踊と杖踊

—黒沢に伝えられている民俗芸能—

会員 山崎 作 一

これまで何回かこの誌上で紹介してきました。榑津礼城主佐伯惟治公さまの富尾神社は、私の部落青山黒沢の船形(ふねがしたと呼ぶ)に鎮座しています。

この神社は黒沢部落の氏神で、祭典には四百年の昔から、神踊と杖踊十八番の奉納行事があります。大正から昭和の初めごろが特に盛んで、戦時中もたゆることなく、村中ほとんど全部が参加し、お祭り前一月間踊りの女らし(練習)が行なわれていました。

終戦後日当部落もお多分にもれず昔からの風習はさびれ、神樂祭典は取りやめ、ただお祭だけとなり、老人たちが神踊と杖踊三番だけを諸願成就のお礼として奉納していた有様でした。しかし後を継ぐものがなく、年々人数が減る一方、神社に對しまたこれまで伝えてくれた祖先に對し、まことに相すまぬ次第と苦慮してまいりました。

とこもが、去る昭和四十一年三月、民俗芸能として大分県の無形文化財に指定されました。その当時、深天多喜男先生たちにより、「大分県地方史」や文化財調査報告書「大分地方民俗芸能」などの本で広く紹介されました。その時は部落民一同元氣が出て、全員で祭礼行事を行ない、深矢先生からもご覽いたたまりました。しかし神踊、杖踊とも後継者がなく、又々さびれがちとなりました。時世がちがって、若い者たちが祭礼行事など、見向かないようになったかんでしよう。